

阪南市埋蔵文化財報告XV

# 貝 掛 遺 跡

—90— 1区—

1992年

阪南市教育委員会

# は し が き

大阪府の南部に位置する阪南市は、この近年大阪のベッドタウンとして人口が急増し、昨年10月に市制を施行し、「阪南町」から「阪南市」へと移行いたしました。

教育委員会では、文化財保護行政の一環として、周知の埋蔵文化財包蔵地内における様々な開発行為の事前に発掘調査を実施し、埋蔵文化財の保存、保護に努めています。今回の調査もこうした開発工事の事前に行ったものです。市域の北端中央部に位置します貝掛遺跡は、以前より様々な土器や石器等の遺物が採集されてきました。1987年に行われた調査では、縄文時代の石鏃をはじめ、様々な時代の遺物が出土し、中世期と考えられる溝を確認しています。また、関西新空港建設事業に伴う土砂採取事業のための道路建設に先立ち実施された調査では、文献で確認されていた近世期の村の存在が実証されています。このように、貝掛遺跡は、縄文時代より近世にかけての遺跡として知られています。今回の調査は、民間の開発事業に伴い実施されたものです。平安時代から鎌倉時代頃の溝が検出されたのをはじめ、種々の遺構、遺物が確認されました。

ここにその報告を行いません。市内の文化財を知る上で活用していただければ幸いです。

末筆ではありますが、調査に御協力下さった事業者、土地所有者ならびに関係者に感謝いたしますと同時に、今後とも文化財の保護にご理解、ご協力をお願いいたします。

1992年3月

阪南市教育委員会

教育長 庄司菊太郎

# 例 言

1. 本書は、阪南市貝掛所在の貝掛遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、自動車販売会社の店舗建設に伴い、工事の事前に実施した。
3. 調査は、阪南町（当時）教育委員会社会教育課が実施し、同課職員三好義三、同課嘱託職員田中早苗が担当した。現地の第1次調査を1990年8月22日に、第2次調査を同年12月3日より1991年2月末日まで実施した。
4. 調査にかかる費用は、上記の自動車販売会社の負担によった。
5. 本書の執筆は、第1章第1節を光石鳴巳が、第1章第2節及び第2章、第3章を三好が行った。また、実測図、遺物観察表等の作成は、田中をはじめとして下記の調査従事者による。編集は主に三好が行った。
6. 本書内に示した標高は、T.P.であり、方位は既成の地形図等を使用したものを除いて磁北である。
7. 調査にあたっては、上記の自動車販売会社をはじめとして調査地周辺の土地所有者等関係各位の理解と協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。
8. 本調査における記録は、実測図面、写真、カラースライド等に保存されている。当教育委員会にて保管しているので、広く活用されたい。

# 目 次

第1章 歴史的環境	1
第1節 阪南市域の状況	
第2節 貝掛遺跡の状況	
第2章 調査の成果	6
第3章 まとめ	22
遺物観察表	24

# 第1章 歴史的環境

## 第1節 阪南市域の状況

阪南市域は南に和泉山脈をひかえ、北の大阪湾に向けて台地や低地が開けている。これらの台地や低地部は、かつての河原や氾濫原であった礫層が主である<sup>(1)</sup>。新興住宅地として開発された丘陵部を除けば、人々の生活の場はこうした台地や低地部が主であり、現在周知されている埋蔵文化財包蔵地の分布も、多くはこれに一致する。

市域の東を隔する男里川の下流域には沖積地が形成され、阪南市でも最大の平地部である。この流域に立地する諸遺跡のなかには、縄文時代の遺物を出土するものが知られている。馬川北遺跡で後晩期の土器片が出土しているほか、各種石器の出土が馬川、向出、自然田などの諸遺跡で知られている。しかし、続く弥生時代も通じて、遺物の量も決して多くはなく、遺構も確認されていない。古墳時代後期は、男里川流域が最も脚光を浴びる時期であり、高田山、玉田山両古墳群で計6基の古墳が断続的に造営される<sup>(2)</sup>。

弥生中期の方形周溝墓で知られる神光寺（蓮池）遺跡の周辺には目立った河川は存在しないが、中世の構築との伝承もある蓮池が、この地域の景観のを形成する大きな要素となっている。地形の成因からは前記の男里川流域に含めて考えてよい地域であるが、遺跡分布の隔たりを考慮して、ここでは、神光寺（蓮池）遺跡と海側の鳥取周辺の諸遺跡をまとめて考えておきたい。前記の蓮池は有茎尖頭器の出土地点としても知られている<sup>(3)</sup>。この有茎尖頭器は、幅広のいわゆる「柳又型」と呼ばれてきた形態で、この地域の歴史が縄文草創期にまで遡り得ることを予測させる。

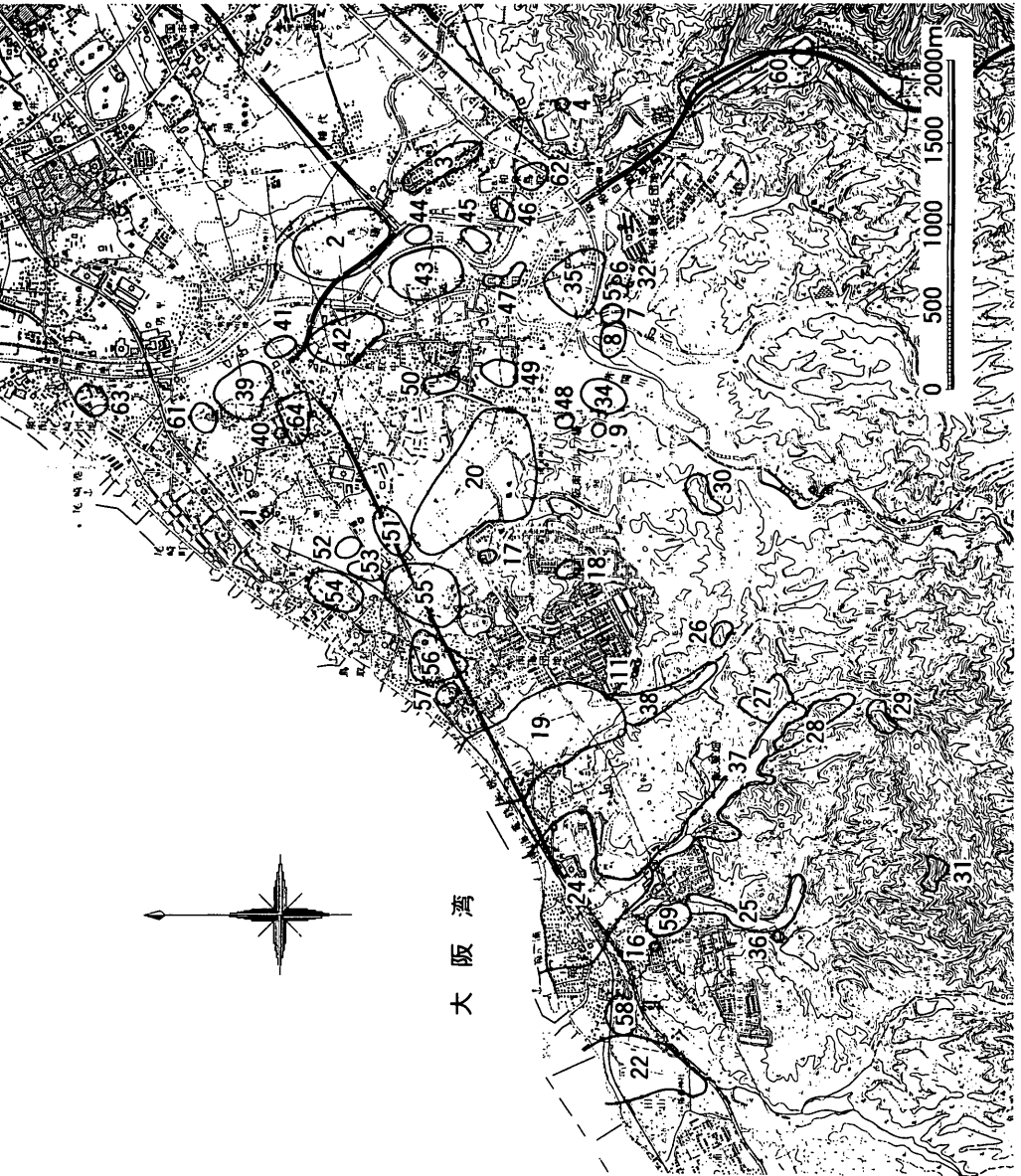
茶屋川水系に連なる飯ノ峯川流域では、南北朝期の山城、井山城址が上流域にあたる山地部に築かれたことが知られている。近世になると和泉砂岩の採掘の行われたミノバ石切場が操業を開始し、それに伴い中流域にはその工人集団によって集落が営まれ、飯ノ峯畑遺跡として知られている。これら諸遺跡につ

いては、かつて(財)大阪府埋蔵文化財協会による調査<sup>(4)</sup>が行われており、特に井山城址とミノバ石切場跡は、当該遺跡の全貌の判明した数少ない調査例として阪南市の歴史を特徴づけている。下流域においては、これらの河川によって形成された扇状地のかなりの部分に箱作今池遺跡があてられている。また、田山東遺跡についてもこの流域に含めて考えてよいかもしれない。

阪南市南西部、田山川下流域の扇状地部分を占める田山遺跡は、その立地から推察されるように、漁労集落としての色彩が濃い遺跡である。遺物や遺構からは奈良時代と中世にその興隆期を認められる。

#### 註

- (1)前田 昇(1977)「自然地理」『阪南町史』下巻
- (2)西山要一(1980)『淡輪磯山古墳群』(磯山古墳群調査会)
- (3)田中英夫(1983)採集と狩猟の時代『阪南町史』上巻
- (4)(財)大阪府埋蔵文化財協会(1988)『井山城址』
- (4) 同 (1988)『ミノバ石切場跡』



- |    |           |    |        |
|----|-----------|----|--------|
| 1  | 皿田池古墳     | 37 | 飯ノ峯畑遺跡 |
| 2  | 平野寺(長楽寺)跡 | 38 | 金剛寺遺跡  |
| 3  | 高田山古墳群    | 39 | 馬川遺跡   |
| 4  | 雨山遺跡      | 40 | 内畑遺跡   |
| 5  | 玉田山古墳群    | 41 | 下出北遺跡  |
| 6  | 玉田山遺跡     | 42 | 室堂遺跡   |
| 7  | 寺田山遺跡     | 43 | 向出遺跡   |
| 8  | 岩崎山遺跡     | 44 | 久保田遺跡  |
| 9  | 石田山遺跡     | 45 | 高田西遺跡  |
| 11 | 塚谷古墳群     | 46 | 高田南遺跡  |
| 16 | 箱作古墳      | 47 | 向山遺跡   |
| 17 | 三味谷遺跡     | 48 | 小口谷遺跡  |
| 18 | 三升五合山遺跡   | 49 | 西畑遺跡   |
| 19 | 貝掛遺跡      | 50 | 正方寺遺跡  |
| 20 | 神光寺(蓮池)遺跡 | 51 | 黒田南遺跡  |
| 22 | 田山遺跡      | 52 | 黒田西遺跡  |
| 24 | 箱作今池遺跡    | 53 | 鳥取遺跡   |
| 25 | 茶屋遺跡      | 54 | 鳥取北遺跡  |
| 26 | 四郎太郎遺跡    | 55 | 鳥取南遺跡  |
| 27 | 稻丸遺跡      | 56 | 西鳥取遺跡  |
| 28 | 井山城跡      | 57 | 戎遺跡    |
| 29 | 箱作ミノハ石切場跡 | 58 | 田山東遺跡  |
| 30 | 師道谷遺跡     | 59 | 箱作南遺跡  |
| 31 | 箱作細谷石切場跡  | 60 | 山中溪遺跡  |
| 32 | 玉田山須恵器窯跡  | 61 | 馬川北遺跡  |
| 34 | 井関遺跡      | 62 | 和泉鳥取遺跡 |
| 35 | 自然田遺跡     | 63 | 福島遺跡   |
| 36 | 箱作仏屋谷石切場跡 | 64 | 下出遺跡   |

第一圖 阪南市埋藏文化財分布図

## 第2節 貝掛遺跡の状況

貝掛遺跡は、阪南市の中央北端部、釈迦坊川、花折川が形成する谷に位置する。以前は、この谷の出口付近において、石鏃等が採取されていたことからこの部分のみが貝掛遺跡として周知されていた。1986年に関西新空港建設事業に伴う土砂採取事業に先立ち大阪府教育委員会により実施された分布調査によって、谷のほぼ全域にわたり遺物の散布が確認された<sup>(1)</sup>。

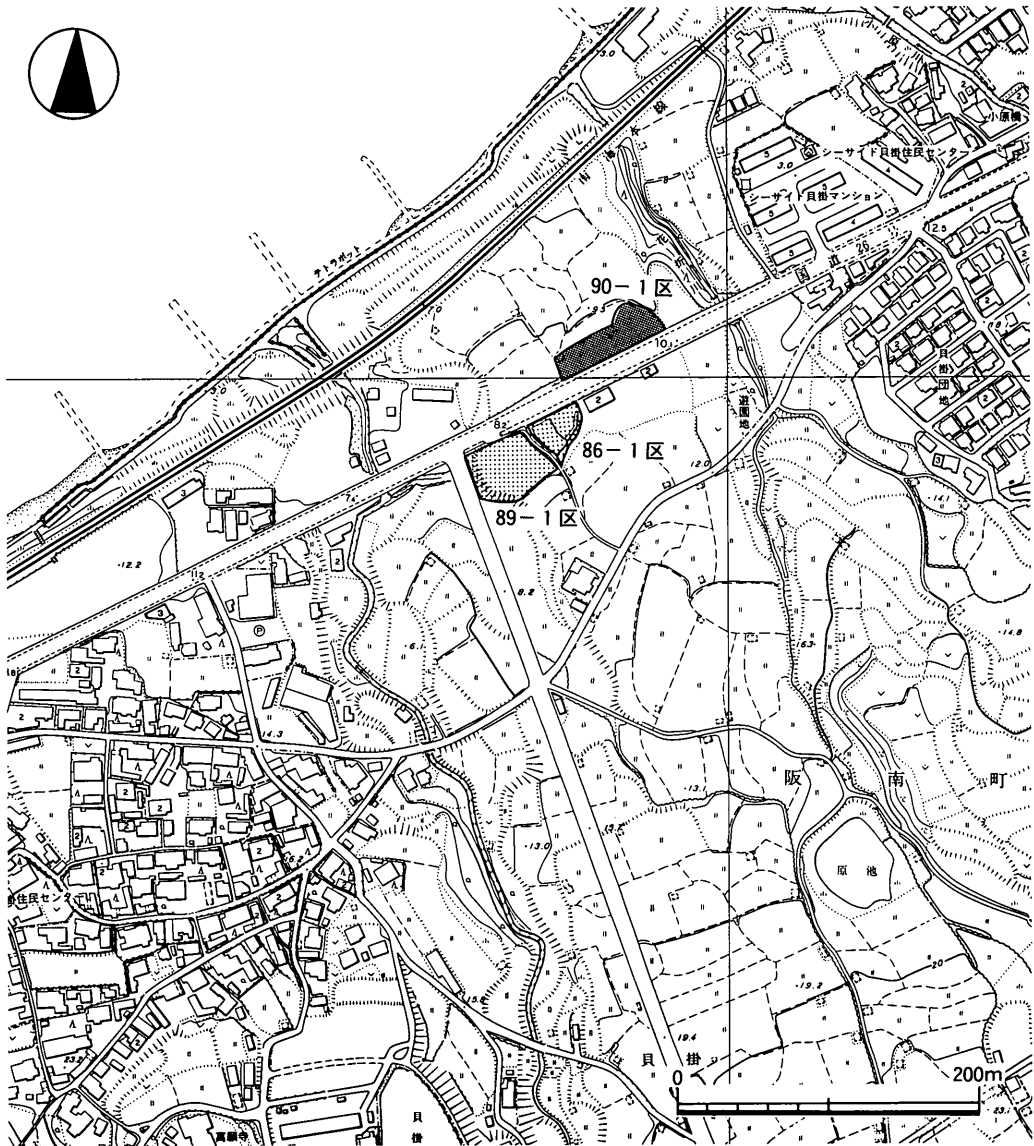
これまでの調査では、1987年に本教育委員会が調査した86-1区において、中世期の溝が数状検出された他、縄文時代の石槍、石鏃、須恵器、土師器、瓦器等様々な遺物が確認されている。同じく1987年に(財)大阪府埋蔵文化財協会が実施した調査では、近世期の建物跡が確認され、文献、絵図等で記載がされていた同時期の集落「舞村」の存在が裏付けられている<sup>(2)</sup>。また、1989年に本教育委員会が実施した89-1区では、7世紀前半の建物跡を検出している他、土坑から金環、三彩長杯の破片をはじめ様々な土器が確認されている<sup>(3)</sup>。

一方、この谷の約900m上方には、塚谷古墳群が所在しており、1970年代に大阪府教育委員会により発掘調査が実施されている。この調査では、古墳時代後期の横穴式石室を主体部とする円墳2基が確認されている。築造年代は、6世紀末～7世紀初め頃とされており、釈迦坊川周辺での築造集団の存在が想定されている<sup>(4)</sup>。上述の89-1区の調査で確認された建物跡をはじめとする遺構群は、この塚谷古墳群の築造集団との関連性を示唆するものであろう。しかし、89-1区の東に隣接する86-1区の調査では、この塚谷古墳群の築造年代に合った遺物が少なからず検出されているものの、直接集落に結び付くような遺構は検出されていない。同時代の集落は、89-1区の南方に広がっている可能性が考えられている。

以下に報告を行う今回の調査区(90-1区)は、86-1および89-1区と現在の国道を隔てて位置することから、この集落跡の拡がりを確認する上で意義深いものと考えられる。

註

- (1) (財)大阪府埋蔵文化財協会(1985)『阪南町内埋蔵文化財』
- (2) 同 (1988)『貝掛遺跡』
- (3) 阪南市教育委員会(1992)『貝掛遺跡II』
- (4) 西山要一(1980)『淡輪磯山古墳群』(磯山古墳群調査会)



第2図 調査区位置図

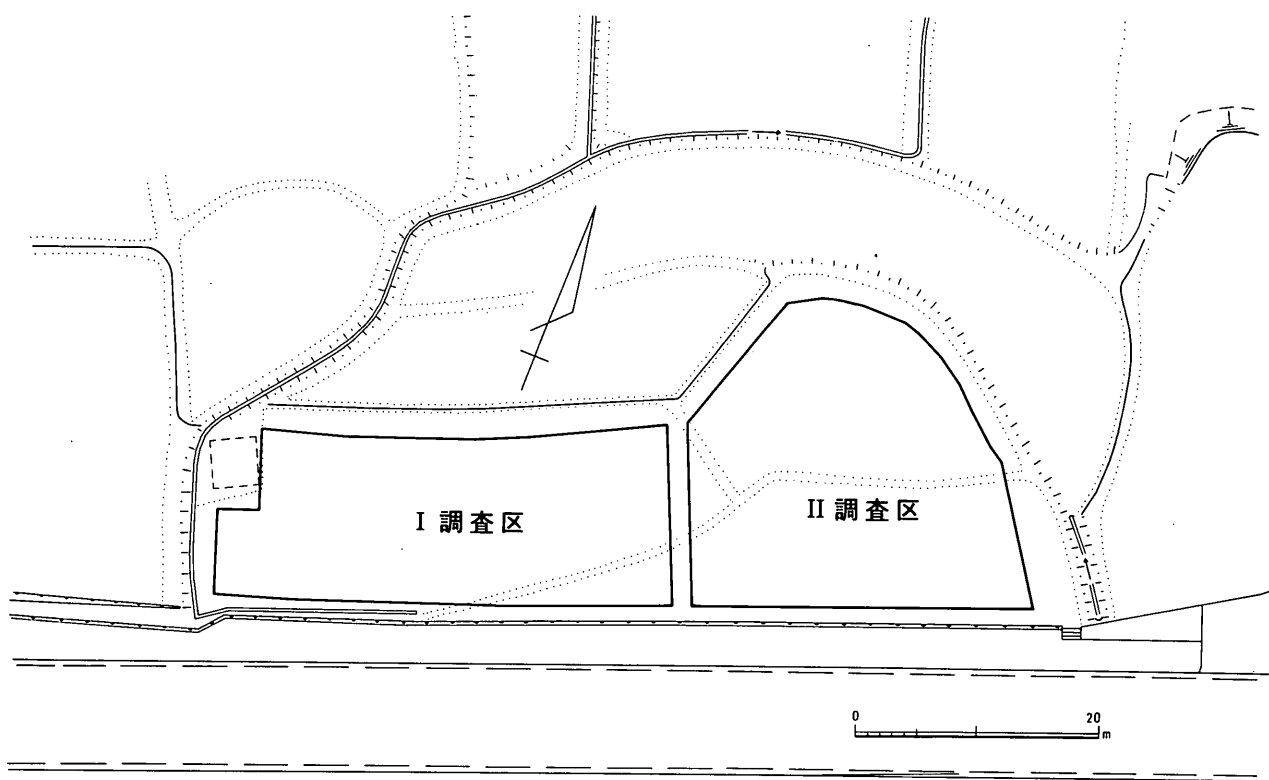


## 第2章 調査の成果

### 1. 調査の概要

民間の開発工事に伴う調査である。開発申請地は、釈迦坊川の右岸段丘上にあたり、調査区が面している国道26号線より一段高くなった地であった。このため開発工事により1 m以上の切り土が計画されていた。このことから開発申請地の全面にわたる調査を実施することとなった。

調査地区は、貝掛遺跡の中央やや北よりの地域に位置し、先述したように釈迦坊川の右岸段丘上に立地する。以前の調査では、今回の調査区の南方数十mの86-1区において中世期遺構の溝、ピットが検出されている。同調査区からは遺物として、縄文時代のものと考えられる石鏃、石槍が確認されているのをはじめ、中世期までの各時代の遺物が出土している。これらのことから周辺にそれぞれの時代の遺構の存在が想定されていた。



第3図 90-1区 調査区 設定区

調査は、申請地内にまず数箇所のトレンチを設定し、第1次調査として遺構、遺物の存在の有無、遺物包含層の厚さ等を把握した後、第2次調査として開発地域内の全面調査を実施した。掘削した土砂を仮置きする必要性があったため、調査区を東西の2地区に分け、東方をI調査区、西方をII調査区とした。

耕作土を機械で掘削を行い、以下の遺物包含層を人力で掘削を行った。この結果、調査区全域で遺物包含層の存在が確認されたのをはじめ、I・II調査区でピットや耕作に伴うと考えられる溝、II調査区で土坑、落ち込みを検出した。遺物としては、製塩土器、土錘、蛸壺等の漁労関係遺物の他、瓦や瓦器等が出土した。

## 2. 基本層序 (第4・5図)

I調査区の耕作土以下の基本層序は、2層淡赤褐色砂質土、4層淡茶灰色砂質土(マンガン粒含む)、5層淡灰茶色土(マンガン粒含む)、7層灰茶色粘質土(マンガン粒含む)、8層黄灰色土、10層淡橙灰色粘質土(マンガン粒・礫多く含む)で、この10層が無遺物層であった。

II調査区では、調査区の南側、北側それぞれにかなりの相違がみられた。南側では、耕作土以下4層、5層、9層明黄色粘土、10層の順序で、北側では、2層、3層、5層、10層の順であった。

## 3. 遺構

### I調査区(第6・7図)

#### [溝I-1]

I調査区からII調査区にかけて北東から西南方向に延びる溝。幅40~60cmを呈し、検出面からの深さ10cm程度のものである。一部分のみに石組が認められた。溝の肩の状況から他の部分には、このような石組は施されていなかったようである。埋土は明灰色砂質土、橙灰色土であった。近年の耕作に伴うも

のと思われる。

[溝 I - 2]

幅30～80cm、検出面からの深さ10cm程度を呈する。溝 I - 1 とほぼ並行に延びる。溝 I - 1 との新旧関係は把握できなかった。溝 I - 1 とは違い石組は認められなかった。埋土は淡灰色土、淡黄灰色土であった。溝 I 同様、近年の耕作に伴うものと思われる。

この他、ピット、鋤溝等が検出された。ピットは、調査区東端部、北端部、西端部でそれぞれ数個検出されたが、建物の柱穴のものとは考えられず、杭跡と考えられる。鋤溝は調査区の東より部分で数状確認された。そのすべてがほぼ南北を軸としている。現代の耕作の方向とずれており、その当時から今日にかけて水田が区画整理されたことが予想される。

この他特筆すべき遺構は、確認されなかった。

## II 調査区 (第 8・9 図)

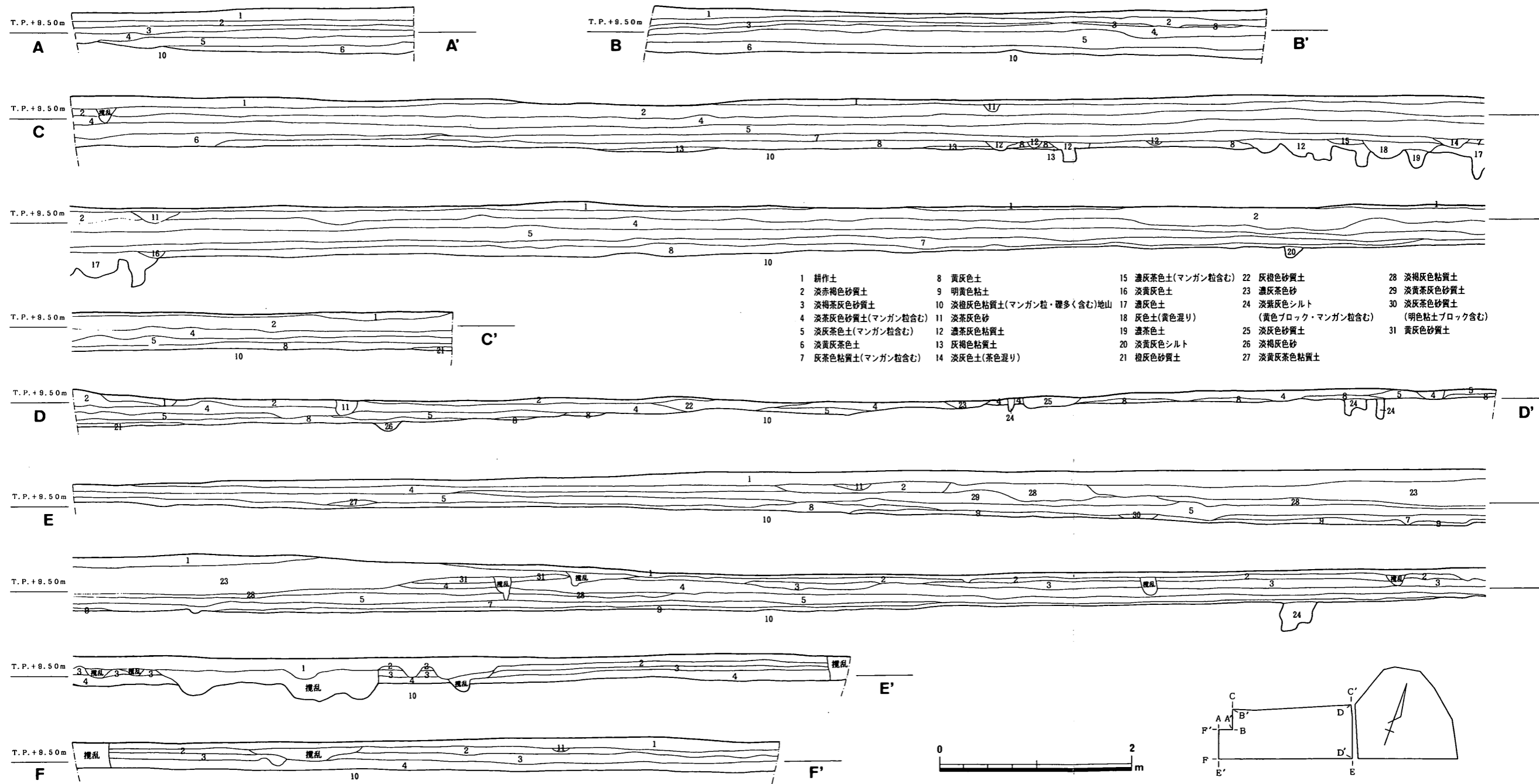
調査区中央に近年の田畑開墾に伴うものと思われる段差が南北方向にみられた。この段差によって以下の遺構のうちいくつかは切られている。

[溝 II - 1]

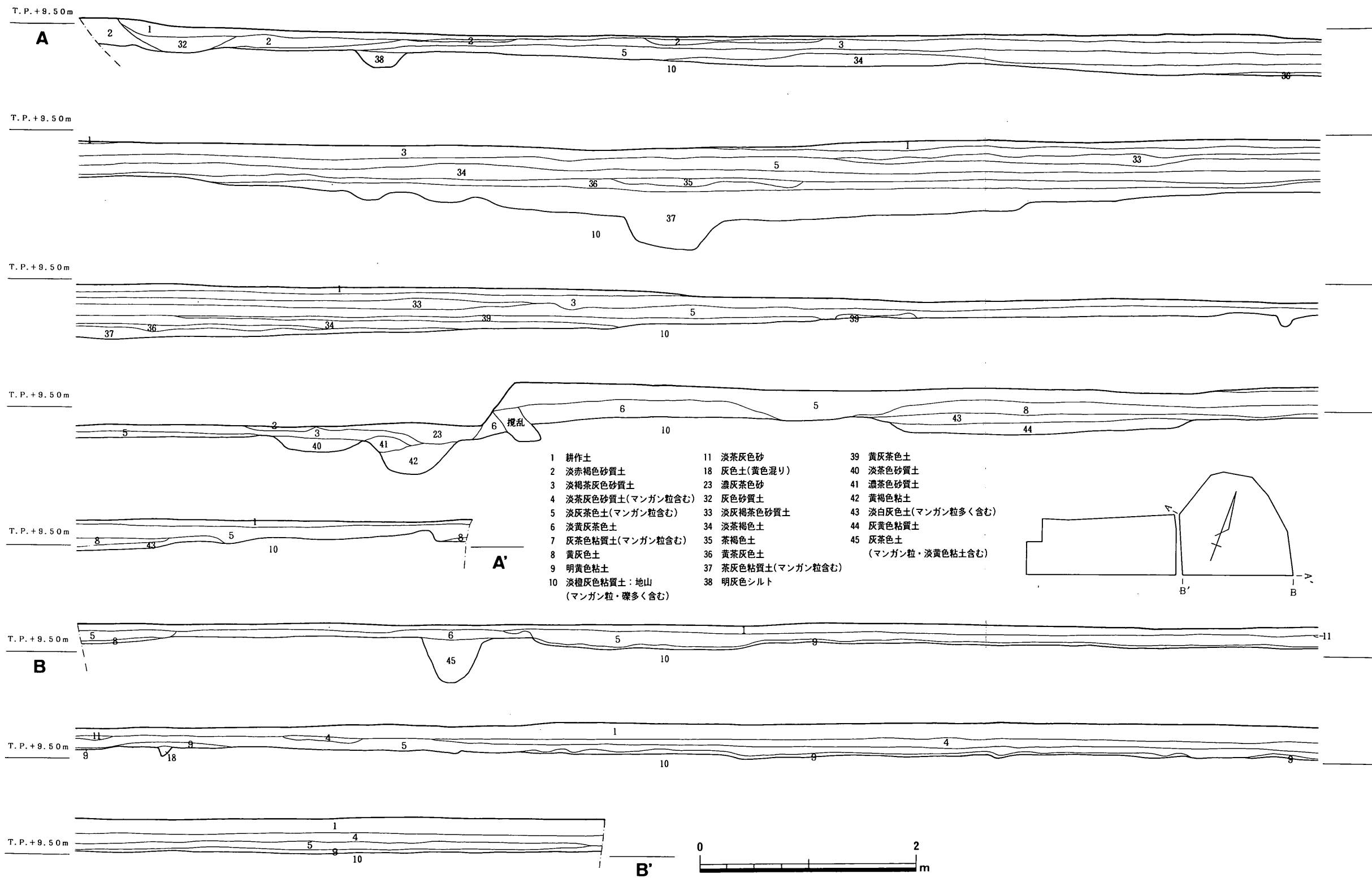
幅40～60cmを呈し、検出面からの深さ20～30cm程度のものである。東から調査区を横断して西方向に延びている。埋土は、基本的に灰茶色土（マンガング粒含む）、明灰色シルト（黄色粘土ブロック混り）、淡灰色砂質土の3層であった。埋土中から須恵器、土師器、瓦器片等が出土している。平安～鎌倉期頃の耕作に伴う人工的な溝であろうか。

[溝 II - 10]

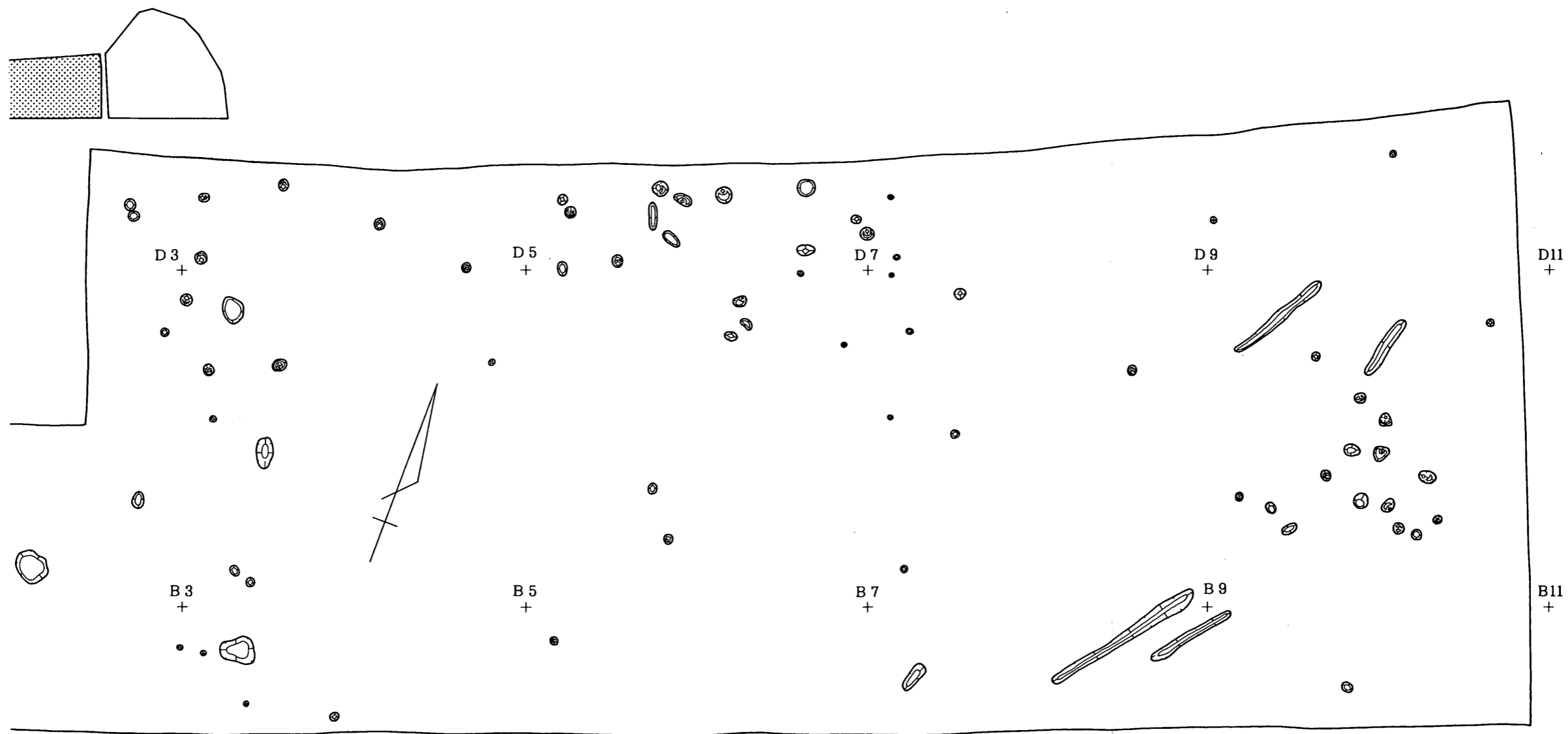
L字形を呈し、幅40cm程度、検出面からの深さ15cm程度の溝である。第1遺構面での検出のため、第7図に示した。溝 I - 1、I - 2 とほぼ並行して流れるが、溝 I - 1 とは違い石組は認められなかった。埋土は暗灰色砂質土、明



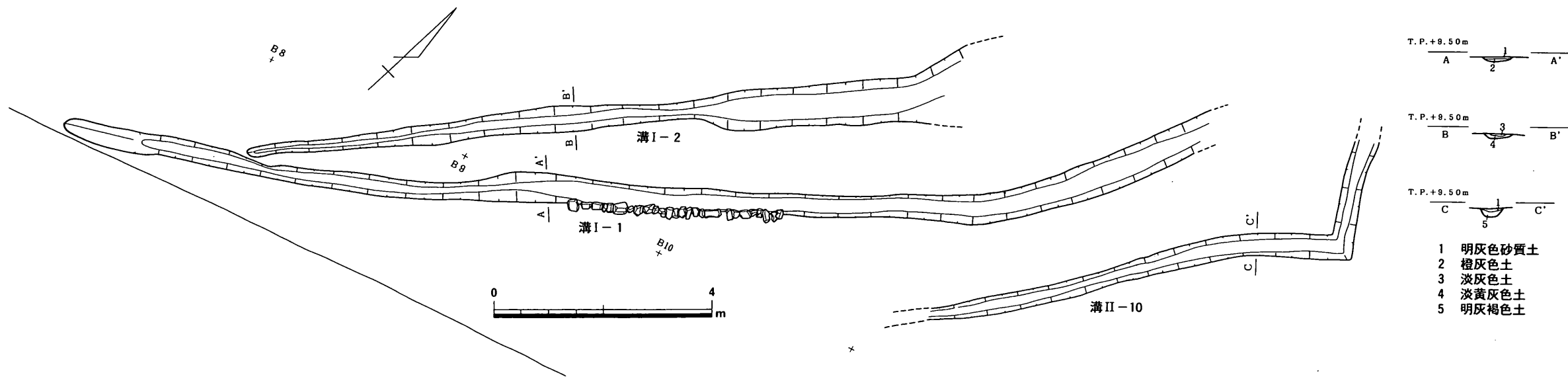
第4図 90-1区 I調査区 断面図



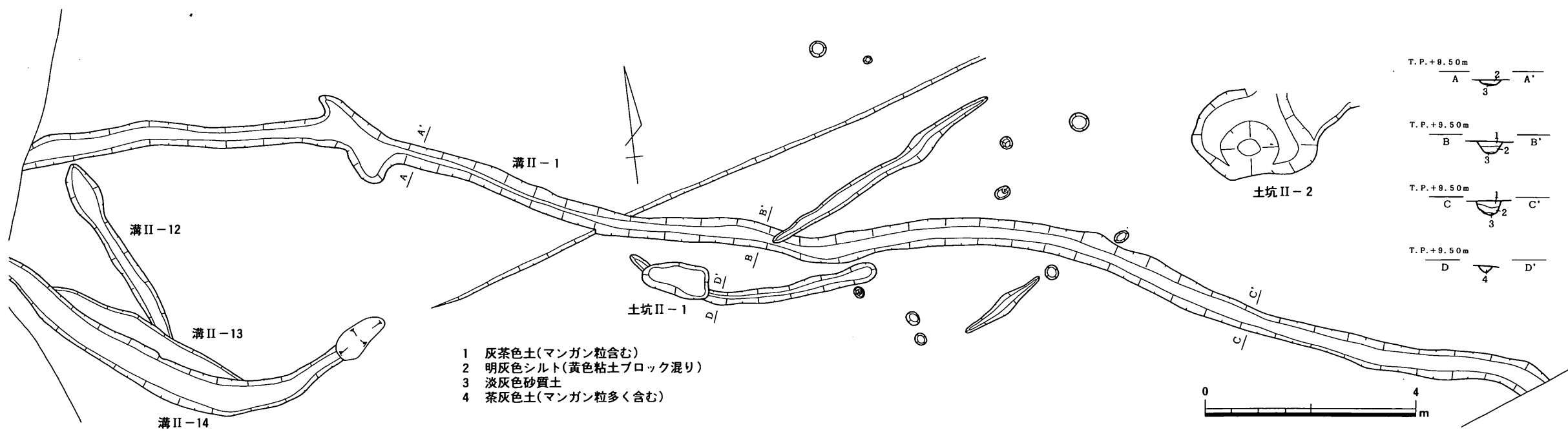
第5図 90-1区 II調査区 断面図



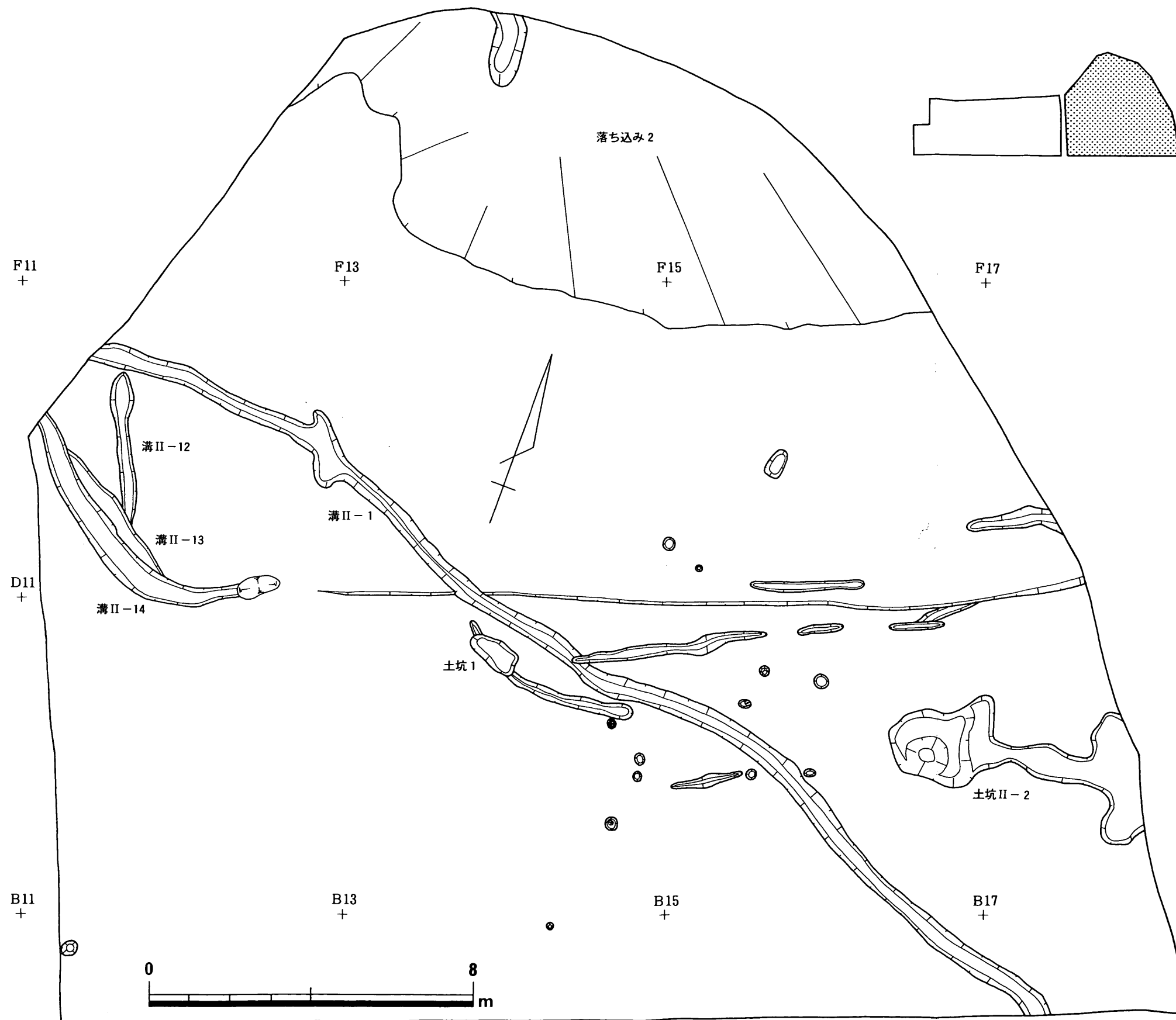
第6図 90-1区 I調査区 平面図



第7図 90-1区 I調査区第1遺構面溝1・2 平面 断面図



第8図 90-1区 II調査区 溝1・2 平面 断面図



第9図 90-1区 II調査区 平面図



灰褐色土であった。溝Ⅰ－１、Ⅰ－２同様、近年の耕作に伴うものと思われる。

〔溝Ⅱ－１２〕

ほぼ南北方向に延びる溝で、幅30～50cm程度、検出面からの深さ5cm程度を呈する。埋土は淡茶灰色土であった。後述の溝Ⅱ－１３、Ⅱ－１４に切られているが、あまり時期差はないものと思われる。

〔溝Ⅱ－１３〕

南東から北西方向に延びる。幅50cm以上、検出面からの深さ5cm程度を呈する。埋土は灰茶色土（黄色混り、マンガン粒含む）であった。Ⅱ－１４に切られているが、あまり時期差はないものと思われる。

〔溝Ⅱ－１４〕

西から北西方向に流れる溝で、幅30～60cm程度、検出面からの深さ7cm程度を呈する。埋土は灰色砂質土であった。近年の耕作に伴うものと思われる。

〔土坑Ⅱ－１〕

調査区の中央で検出した。径約60cm、検出面からの深さ約10cmを呈する。含土は淡黄色土（灰色混り、マンガン粒多く含む）であった。遺物は含まれていなかった。

〔土坑Ⅱ－２〕

調査区の東側部分で検出した不定形の土坑である。径約180cm、検出面からの深さ約35cmを呈する。西方向からの溝が流れ込んでいるようである。遺物は検出されていない。

〔落ち込みⅡ－２〕

調査区北端部から調査区外へ落ちる「落ち込み」を検出した。覆土の状態から田畑開墾以前の自然地形のなごりと思われる。土師質土器、須恵器等が覆土中より出土した。

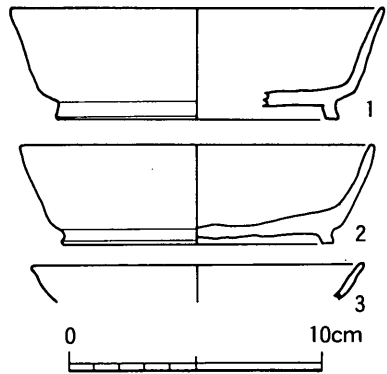
この他、調査区の中央部分でピットが確認されたが、ピットは比較的小さく、並びもなく、柱穴とは考えがたい。調査区の東側部分で鋤溝数状が検出された。ほぼ東西方向に延びており、現代の耕作の方向とほぼ一致する。

## 4. 遺物

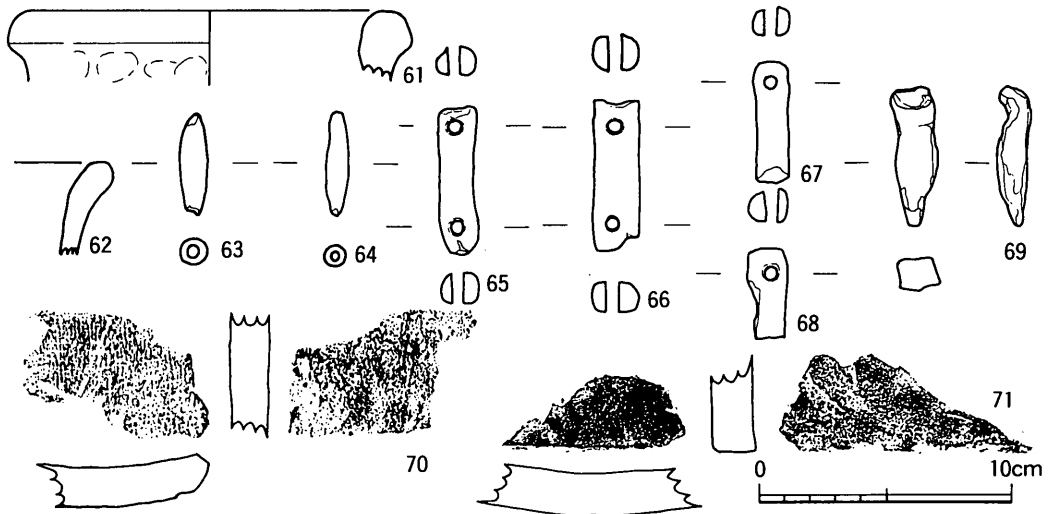
遺構から確認された遺物のうち、図化し得たものは以下の3点であった。

1 および 2 は、ともに溝Ⅱ-1 から出土した須恵器の坏身である。3 は、土坑Ⅱ-2 から検出された土師質土器の碗である。

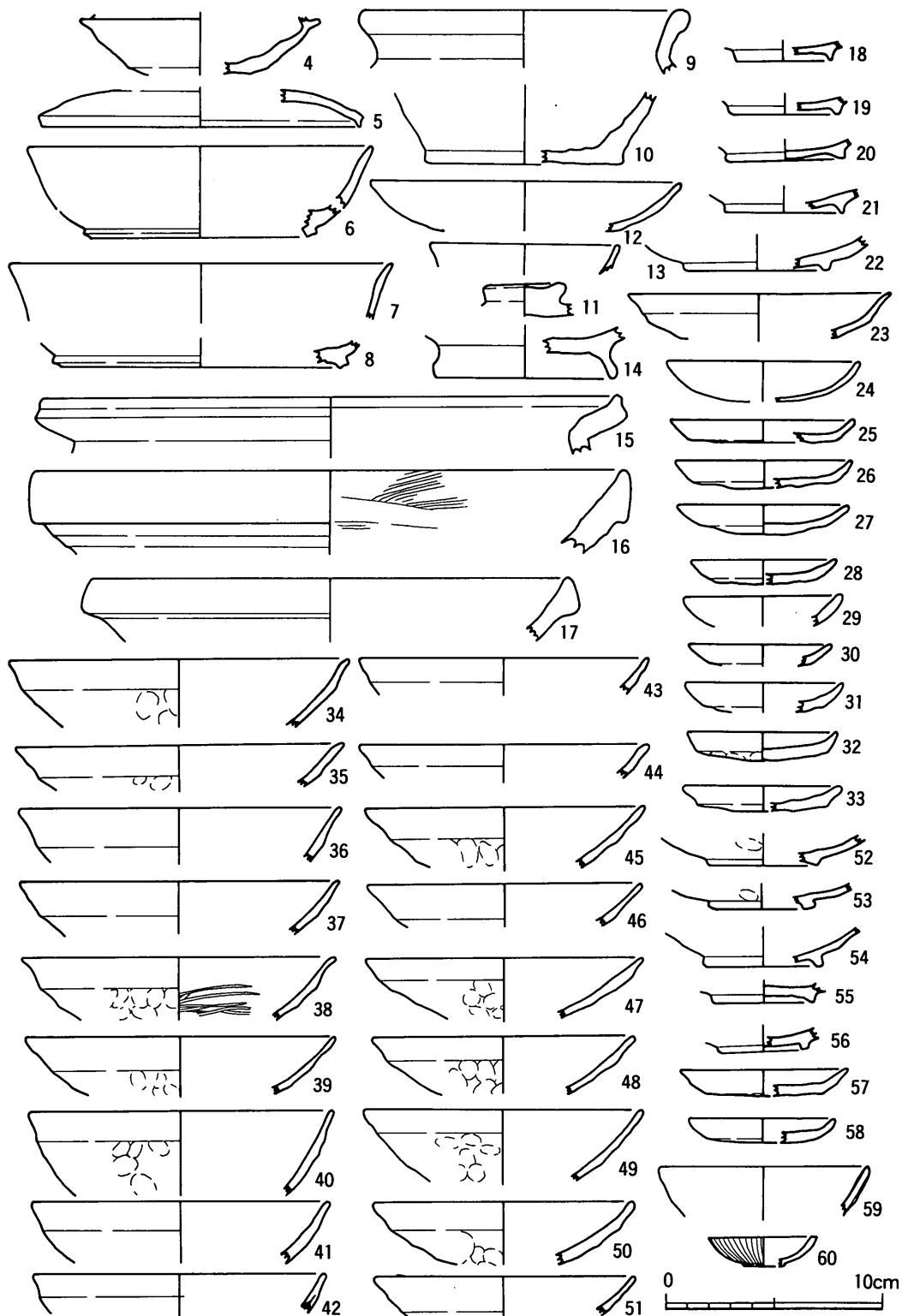
遺物包含層から出土した遺物のうち、図化し得た遺物が約70点であった。この他、点数では、約300点の遺物が出土しているが、図化した遺物以外の器種は認められなかった。図示した遺物の詳細は、遺物観察表を参照されたい。この調査区の遺物の特徴としては、製塩土器をはじめ蛸壺、土錘といった漁撈関係遺物が多く認められた。立地条件からすれば、当然と言えよう。今回の調査では確認できなかったが、近くに漁撈をその主な営みとする村落が存在していたことが想定される。この他、中世期の瓦が若干出土しており、このこともこのような村落の性格を考える上で興味深い。



第10図 貝掛遺跡 90-1区  
溝・土坑 出土遺物



第11図 貝掛遺跡 90-1区 出土遺物



第12图 貝掛遺跡 90-1区 出土遺物

## 第3章 まとめ

以上、今回の調査の概要を報告した。ここで簡単にまとめてみたい。

まず遺構では、溝Ⅱ-1が平安～中世期にかけてのものと考えられるが、これ以外の溝については、近世期以降の所産であると思われる。また、遺物についても、溝Ⅱ-1の時代に伴うものを中心としていた。

今回の調査では直接集落の存在に結び付くような遺構、遺物は確認されなかった。今回の調査のみならず、これまでの隣接地域における調査でも中世期の溝等の確認はされているが、建物跡は確認されておらず、集落の存在については、疑問が残っている。これ以降の時代—近世期以降—には、集落と関係するような遺構のみならず、遺物等の出土もみられないことから、この周辺地域が開墾されて田畑となったようである。集落は、本調査区から約500m西方に離れた現在の貝掛の集落や第1章で述べた「舞村」に移動したと考えるのが妥当ではないだろうか。また、中世以前では、89-3区での古墳時代～奈良時代の集落の存在が確認されており、釈迦坊川右岸に存在していた集落が、中世期を境にして同川の左岸に移行したと考えることができるのではなかろうか。中世期の集落については、阪南市内の他の地域と同様に、少なくとも近世期には成立したとされる集落—大字—とほぼ一致する形で存在していたのではないかと思われる。これについては、現在の貝掛集落内では調査が実施された例がなく、この集落が中世期まで遡るか否かは判然としないが、西に立地する箱作地区内では、現有の近世期以降の集落が箱作今池遺跡内に含まれ、この集落内の調査地区からは中世期の遺構が検出されているほか、遺物も多量出土している。今後、現在の貝掛集落内での調査が実施されれば、明らかになってくるものと思われる。また、この周辺の集落の性格については、今回の調査での出土遺物からも想定できるように、古代より近世までほぼ変化することなく、農業、漁業両面の性格を持った集落であったと思われる。海岸線に立地する阪南市内の他の集落と同様であったようである。

以上のように、今回の調査について概略を述べた。貝掛遺跡の全貌については、今後の面的な調査に期待したい。しかし、民間の開発行為に伴う緊急発掘

調査にその全盛力を注ぎ込んでいる行政発掘では、その調査に限界性を感じ得ない。近年の開発行為の増加により、外業調査に追われ、内業調査、報告書の作成等についてはその作業が山積みになっているのが現状である。この現状に甘んじず、こうした山積みされた課題を解決するため、目先だけに捕らわれないう先を見越した行政のあり方を検討していくべきではないだろうか。調査にたずさわる担当者も内業調査や調査報告書の作成を行わない調査は、調査とはいえないことを十分に認識し、今後の調査に臨みたいものである。

# 遺 物 観 察 表

挿 番 号	種 類	器 種	法 量 (cm)	手 法	胎 土	焼成	色 調	備 考
1	須恵器	坏身	口径 14.6 残存高 4.4 底径 11.0	外面 口縁部 横ナデ 回転ヘラ切り 内面 底 部 横ナデ	密 (4mm大の小石を含む)	良好	内外断 灰色 暗灰色 灰色	残存15% 反転復元
2	須恵器	坏身	口径 13.8 残存高 3.9 底径 10.6	外面 口縁部 横ナデ 回転ヘラ切り 内面 底 部 横ナデ	密 (砂を含む)	不良	内外断 灰白色 橙茶白色	残存20% 反転復元
3	土師質	碗	口径 13.0 残存高 1.45 底径 -	外面 磨減のため調整不明 内面 //	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 橙色 // //	小片 反転復元
4	須恵器	坏身	口径 - 残存高 2.6 底径 -	外面 体 部 横ナデ 回転ヘラ削り 内面 口縁部 横ナデ 底 部 ナデ	密 (2~4mm大の小石を含む)	良好	内外断 青灰色 暗灰色 茶褐色	小片 反転復元
5	須恵器	坏蓋	口径 14.7 器高 1.7 底径 -	外面 口縁部 横ナデ 天井部 回転ヘラ削り 内面 横ナデ	密 (微砂粒を含む)	良好	内外断 灰色 // //	小片 反転復元
6	須恵器	坏身	口径 15.8 器高 2.9 底径 -	外面 横ナデ 内面 //	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 暗青灰色 // 茶灰色	小片 反転復元
7	須恵器	坏身	口径 17.6 残存高 2.65 底径 -	外面 横ナデ 内面 //	密 (砂粒を含む)	良好	内外断 灰色 暗灰色 灰色	小片 反転復元
8	須恵器	坏身	口径 - 残存高 12.5 底径 12.8	外面 体部 横ナデ 底部 回転ヘラ切り 内面 ナデ	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 灰色 // //	小片 反転復元
9	須恵器	壺	口径 14.6 残存高 2.9 底径 -	外面 横ナデ 内面 //	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 灰色 暗灰色 暗灰黄色	小片 反転復元
10	須恵器	壺	口径 - 残存高 3.4 底径 9.2	外面 体部 横ナデ 底部 糸切り 内面 横ナデ	密 (細砂粒・小石を含む)	良好	内外断 暗灰色 灰色 暗灰色	小片 反転復元
11	土師器	坏蓋	残存高 1.6 つまみ径 3.85	外面 横ナデ 内面 //	密	良好	内外断 橙色 // //	小片 反転復元
12	白土器	皿	口径 14.2 残存高 2.3 底径 -	外面 磨減のため調整不明 内面 //	密	良好	内外断 乳白色 // //	小片 反転復元
13	白土器	碗	口径 8.6 残存高 1.4 底径 -	外面 磨減のため調整不明 内面 //	密	良好	内外断 乳白色 // 黄茶色	小片 反転復元
14	土師質	碗	口径 - 残存高 0.85 底径 4.4	外面 横ナデ 内面 指圧痕	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 黄茶色 淡橙白色	小片 反転復元
15	土師器	甕	口径 26.6 残存高 2.5 底径 -	外面 横ナデ 内面 横ナデ	やや粗 (砂粒を多量に含む)	良好	内外断 黄茶色 淡黄茶色 茶色	小片 反転復元
16	土師質	鉢	口径 27.2 残存高 3.8 底径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 回転ヘラ削り 内面 横方向のハケ目後ナデ	密 (細砂粒2mm大の小石を含む)	良好	内外断 灰黄色 淡橙白色 淡茶白色	小片 反転復元
17	土師質	鉢	口径 21.8 残存高 2.9 底径 -	外面 磨減のため調整不明 内面 //	密 (砂粒・赤色酸化土粒を含む)	良好	内外断 橙色 // //	小片 反転復元
18	土師質	碗	口径 - 残存高 0.85 底径 4.4	外面 磨減のため調整不明 内面 //	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 黄茶色 淡橙白色 //	小片 反転復元
19	土師質	碗	口径 - 残存高 0.8 底径 4.8	外面 横ナデ 内面 磨減のため調整不明	密 (赤色酸化土粒を含む)	良好	内外断 淡茶白色 橙白色 //	小片 反転復元
20	土師質	碗	口径 - 残存高 0.9 底径 5.2	外面 横ナデ 内面 磨減のため調整不明	密 (微砂粒を含む)	良好	内外断 淡茶白色 // 橙白色	小片 反転復元
21	土師質	碗	口径 - 残存高 0.8 底径 5.4	外面 横ナデ 内面 磨減のため調整不明	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 橙色 // //	小片 反転復元
22	土師質	碗	口径 - 残存高 1.6 底径 6.4	外面 磨減のため調整不明 内面 //	密 (砂粒・小石を含む)	良好	内外断 暗黄茶色 淡茶色 明茶色	小片 反転復元
23	土師質	碗	口径 12.0 残存高 2.1 底径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 横ナデ	密	良好	内外断 淡茶白色 // 黄茶色	小片 反転復元
24	土師質	小皿	口径 8.8 残存高 1.9 底径 -	外面 磨減のため調整不明 内面 //	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 橙白色 橙白色 橙白色	小片 反転復元

# 遺 物 観 察 表

挿 図 番 号	種 類	器 種	法 量 (cm)	手 法	胎 土	焼成	色 調	備 考
25	土師質	小皿	口 径 8.4 残存高 1.1 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 底 部 磨滅のため調整不明 内面 口縁部 横ナデ 底 部 横ナデ	密 (砂粒を含む)	良好	内外断 橙白色 〃 〃	小片 反転復元
26	土師質	小皿	口 径 8.0 残存高 1.3 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 底 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 底 部 横ナデ	密 (赤色酸化土粒を含む)	良好	内外断 橙色 〃 〃	残存30% 反転復元
27	土師質	小皿	口 径 7.8 残存高 1.4 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 底 部 磨滅のため調整不明 内面 口縁部 横ナデ 底 部 横ナデ	密 (赤色酸化土粒を含む)	良好	内外断 黄茶白色 〃 黄茶白色	残存25% 反転復元
28	土師質	小皿	口 径 6.6 残存高 1.2 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 底 部 磨滅のため調整不明 内面 口縁部 横ナデ 底 部 横ナデ	密 (赤色酸化土粒を含む)	良好	内外断 橙白色 〃 〃	残存30% 反転復元
29	土師質	小皿	口 径 6.0 残存高 1.4 底 径 -	外面 磨滅のため調整不明 内面 〃	密	良好	内外断 橙白色 〃 〃	小片 反転復元
30	土師質	小皿	口 径 6.4 残存高 0.95 底 径 -	外面 磨滅のため調整不明 内面 〃	密 (赤色酸化土粒を含む)	良好	内外断 橙色 〃 〃	小片 反転復元
31	土師質	小皿	口 径 7.2 残存高 1.4 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 底 部 へら削り 内面 横ナデ	密	良好	内外断 暗茶色 〃 暗茶色	小片 反転復元
32	土師質	小皿	口 径 6.8 残存高 1.4 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 底 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 底 部 横ナデ	密 (砂粒を含む)	良好	内外断 淡茶白色 〃 黄茶色	残存50% 反転復元
33	土師質	小皿	口 径 7.0 残存高 1.2 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 底 部 指圧痕 内面 横ナデ	密 (微砂粒を含む)	良好	内外断 橙白色 〃 淡赤灰色	残存35% 反転復元
34	瓦器	碗	口 径 15.6 残存高 3.1 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 磨滅のため調整不明	密	良好	内外断 黒色 〃 〃 淡黄茶色	小片 反転復元
35	瓦器	碗	口 径 15.0 残存高 2.0 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 磨滅のため調整不明	やや粗	良好	内外断 黄灰色 〃 黒色 〃 黄灰色	小片 反転復元
36	瓦器	碗	口 径 14.8 残存高 2.5 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 横ナデ	密	良好	内外断 灰黒色 〃 灰色 〃 灰白色	小片 反転復元
37	瓦器	碗	口 径 14.6 残存高 2.5 底 径 -	外面 磨滅のため調整不明 内面 〃	密	良好	内外断 灰白色 〃 灰黄白色 〃 灰白色	小片 反転復元
38	瓦器	碗	口 径 14.4 残存高 2.9 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 体 部 横方向へラミガキ	密	良好	内外断 黒灰色 〃 〃 灰白色	小片 反転復元
39	瓦器	碗	口 径 14.2 残存高 2.7 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 体 部 磨滅のための調整不明	密 (砂粒を含む)	良好	内外断 灰白色 〃 黄黒色 〃 灰白色	小片 反転復元
40	瓦器	碗	口 径 14.0 残存高 3.9 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 磨滅のため調整不明	密	良好	内外断 淡黄茶色 〃 淡茶白色 〃	小片 反転復元
41	瓦器	碗	口 径 13.6 残存高 2.8 底 径 -	外面 磨滅のため調整不明 内面 〃	密	良好	内外断 茶黄色 〃 〃	小片 反転復元
42	瓦器	碗	口 径 11.6 残存高 1.8 底 径 -	外面 磨滅のため調整不明 内面 〃	密	良好	内外断 黒黄色 〃 〃 黄茶色	小片 反転復元
43	瓦器	碗	口 径 13.2 残存高 1.8 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 磨滅のため調整不明	密	良好	内外断 黒色 〃 〃 灰黄色	小片 反転復元
44	瓦器	碗	口 径 13.2 残存高 1.6 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 磨滅のため調整不明 内面 体 部 〃	やや粗	良好	内外断 灰白色 〃 黒色 〃 灰白色	小片 反転復元
45	瓦器	碗	口 径 12.2 残存高 3.2 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 体 部 磨滅のため調整不明	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 黒灰色 〃 黒色 〃 灰白色	小片 反転復元
46	瓦器	碗	口 径 12.6 残存高 1.95 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 磨滅のため調整不明	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 灰白色 〃 黒灰色 〃 乳白色	小片 反転復元
47	瓦器	碗	口 径 12.6 残存高 2.8 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 体 部 磨滅のため調整不明	密	良好	内外断 黒灰色 〃 〃 灰白色	小片 反転復元
48	瓦器	碗	口 径 12.0 残存高 2.7 底 径 -	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 体 部 磨滅のため調整不明	密 (細砂粒を含む)	良好	内外断 灰黄茶色 〃 黒灰色 〃 灰白色	小片 反転復元

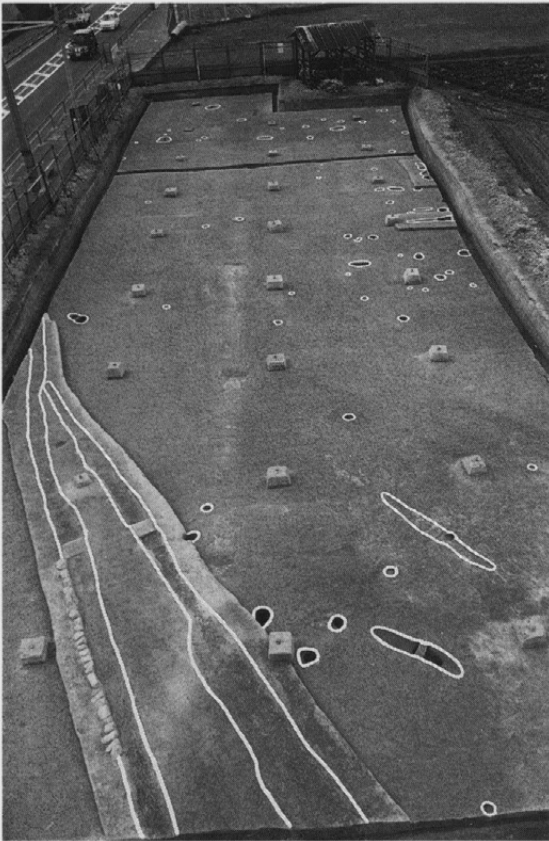
# 遺 物 観 察 表

挿 図 番 号	種 類	器 種	法 量 (cm)	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
49	瓦器	碗	口 径 12.8 残存高 3.3 底 径 1	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 体 部 磨滅のため調整不明	密	良好	内外 灰白色 断 灰黄白色 断 灰白色	小片 反転復元
50	瓦器	碗	口 径 12.0 残存高 3.5 底 径 1	外面 口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 体 部 磨滅のため調整不明	密	良好	内外 黒黄白色 断 黒灰色 断 灰白色	小片 反転復元
51	瓦器	碗	口 径 12.0 残存高 1.8 底 径 1	外面 磨滅のため調整不明 内面 //	密(砂粒を含む)	良好	内外 暗黄茶色 断 //	小片 反転復元
52	瓦器	碗	口 径 1.2 残存高 4.8 底 径 1	外面 体部 指圧痕 底部 横ナデ 内面 磨滅のため調整不明	密(細砂粒を含む)	良好	内外 灰茶色 断 灰色 断 灰白色	小片 反転復元
53	瓦器	碗	口 径 1.2 残存高 4.0 底 径 1	外面 体部 指圧痕 底部 横ナデ 内面 格子状ヘラミガキ	密	良好	内外 銀黒色 断 黒色 断 灰色	小片 反転復元
54	瓦器	碗	口 径 0.95 残存高 3.9 底 径 1	外面 磨滅のため調整不明 内面 //	密(砂粒を含む)	良好	内外 灰黄白色 断 暗茶色 断 黄茶色	小片 反転復元
55	瓦器	碗	口 径 0.85 残存高 4.6 底 径 1	外面 横ナデ 内面 磨滅のため調整不明	密	良好	内外 黒色 断 //	小片 反転復元
56	瓦器	碗	口 径 0.95 残存高 3.9 底 径 1	外面 磨滅のため調整不明 内面 //	密(砂粒を含む)	良好	内外 灰黄白色 断 暗茶色 断 黄茶色	小片 反転復元
57	瓦器	小皿	口 径 7.6 残存高 1.25 底 径 1	外面 口縁部 横ナデ 底 部 指圧痕 内面 口縁部 横ナデ 底 部 ナデ	密	良好	内外 黒灰色 断 灰白色	残存率30% 反転復元
58	瓦器	小皿	口 径 6.6 残存高 1.13 底 径 1	外面 磨滅のため調整不明 内面 //	密	良好	内外 淡黄茶白色 断 黄茶色 断 //	小片 反転復元
59	白磁	碗	口 径 9.6 残存高 2.3 底 径 1		密	良好	内外 白灰色(釉) 断 白灰色(釉) 断 白色	小片 反転復元
60	磁器	紅血	口 径 5.0 残存高 1.35 底 径 1		密	良好	内外 白色(釉) 断 乳白色(釉) 断 白色	小片 反転復元
61	土師質	真蛸壺	口 径 14.4 残存高 2.8 底 径 1	外面 口縁部 磨滅のため調整不明 体 部 指圧痕 内面 磨滅のため調整不明	密(細砂粒・小石を含む)	良好	内外 淡茶白色 断 //	小片 反転復元
62	土師質	製塩土器	口 径 3.7 残存高 1 底 径 1	外面 磨滅のため調整不明 内面 口縁部 体 部 ナデ	密(砂粒を含む)	良好	内外 橙白色 断 橙灰色	小片
63	土師質	管状工鍾	全 長 4.05 幅 1.1 孔 径 0.4	磨滅のため調整不明	密(細砂粒を含む)	良好	内外 茶色 断 黒灰色	完型
64	土師質	管状工鍾	全 長 4.05 幅 0.9 孔 径 0.3	指おさえ	密	良好	外 橙茶色	完型
65	土師質	有孔土鍾	全 長 5.8 幅 1.5 孔 径 0.4	磨滅のため調整不明	密(細砂粒を含む)	良好	外 断 淡茶白色 断 茶色	完型
66	土師質	有孔土鍾	全 長 5.95 幅 1.85 孔 径 0.5	ナデ	密	良好	外 断 橙白色 断 黒灰色	完型
67	土師質	有孔土鍾	残存長 4.85 幅 1.4 孔 径 0.45	磨滅のため調整不明			外 断 淡黄茶白色 断 淡黄茶色	残有80%
68	土師質	有孔土鍾	残存長 3.6 幅 1.4 孔 径 0.5	磨滅のため調整不明	密(細砂粒を含む)	良好	外 断 淡黄茶色 断 明茶灰色	残存60%
69	鉄	釘	残存長 5.5 幅 1.75 厚 さ 1.25				内外 断	小片
70	平瓦		残存長 5.7 残存幅 8.0	凸面 縄目タタキ(離れ砂) 凹面 布目圧痕	密(砂粒を多く含む)	良好	凸 断 灰白色 凹 断 暗茶灰色 断 灰白色	小片
71	平瓦		残存長 4.0 残存幅 9.8	凸面 ナデ(離れ砂) 凹面 横ナデ	密(細砂粒を含む)	良好	凸 断 銀黒色 凹 断 //	小片

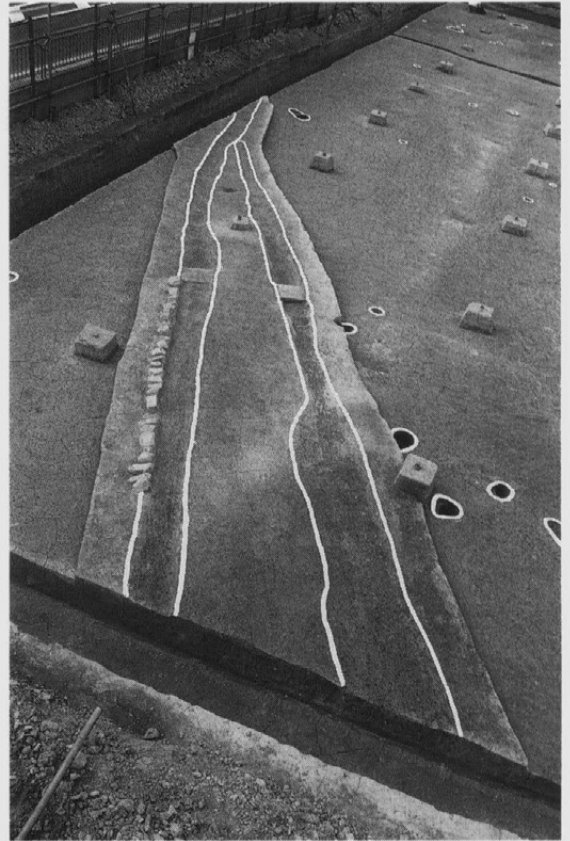




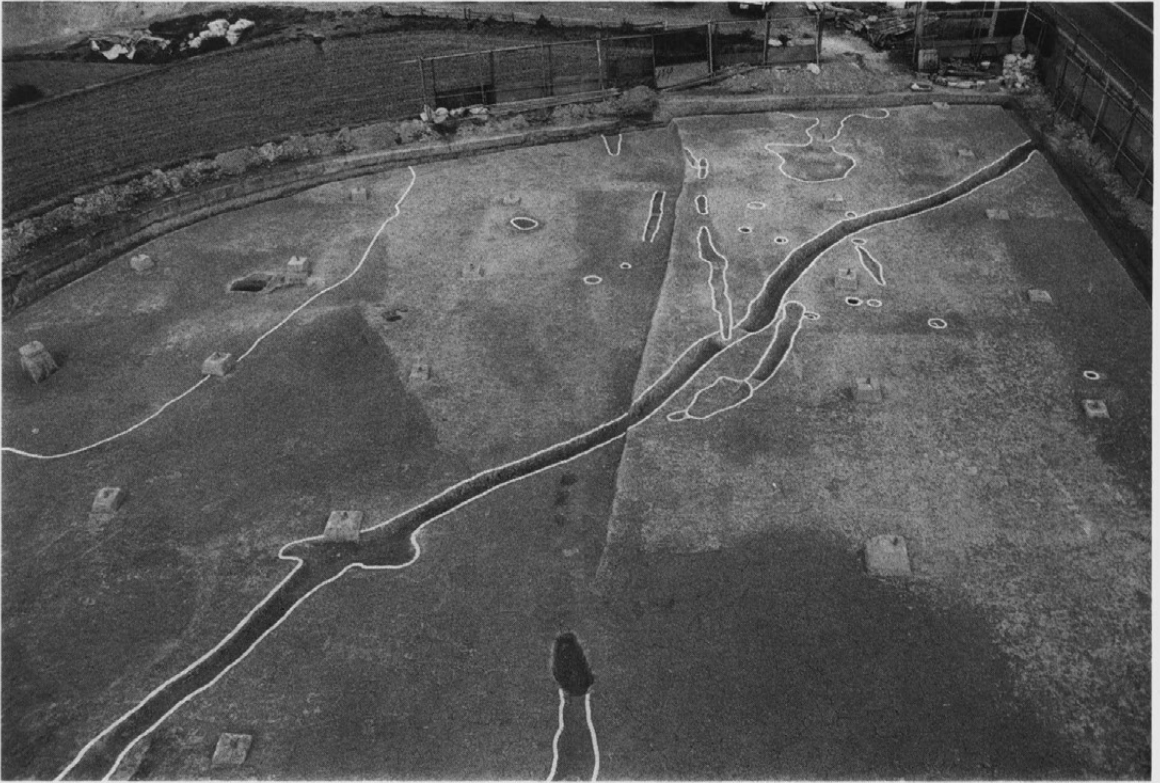
I 調査区より大阪湾をのぞむ



I 調査区全景（東より）



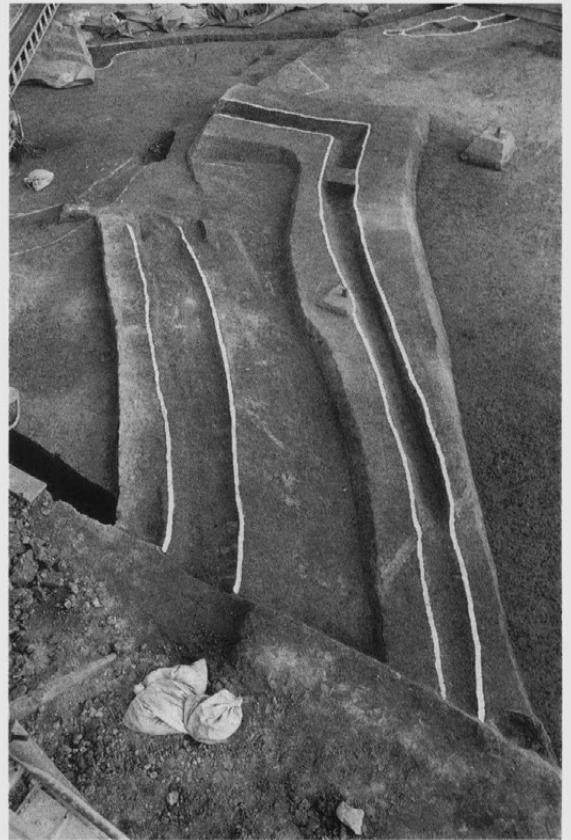
I 調査区 溝 I-1、I-2（西より）



II 調査区全景（西より）



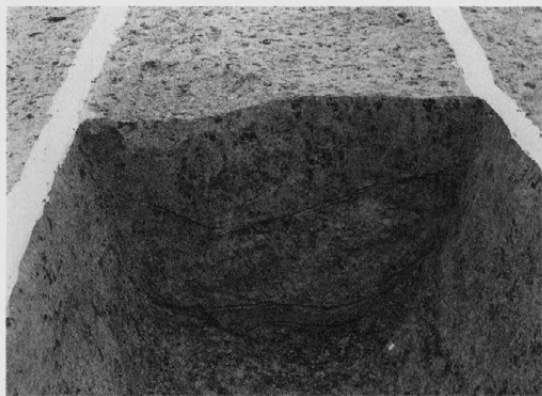
II 調査区西側（南より）



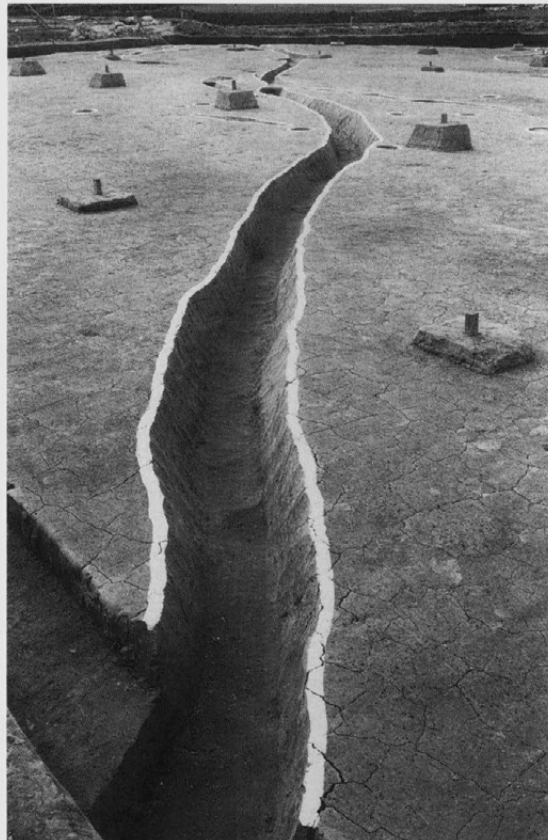
I 調査区 溝 I-1、II-10（西より）



II調査区 溝II-1 (北西より)



II調査区 溝II-1 断面



II調査区 溝II-1 (南東より)



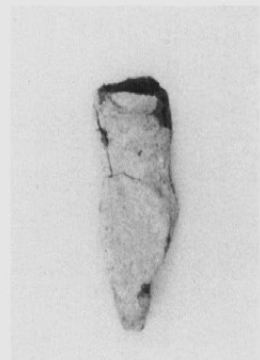
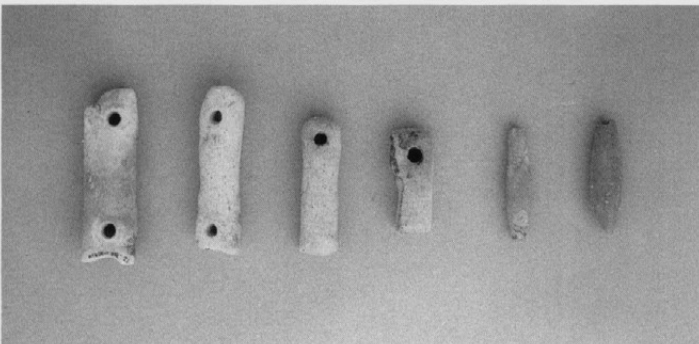
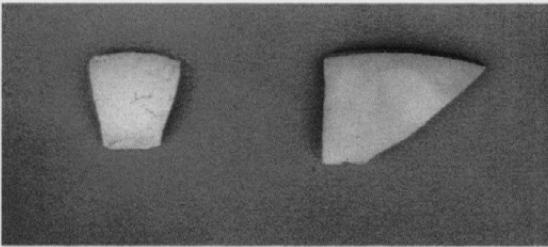
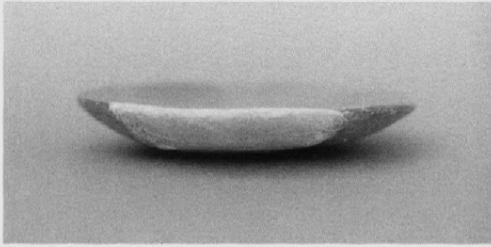
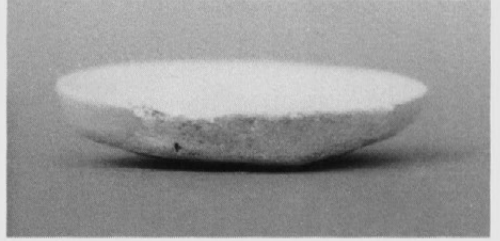
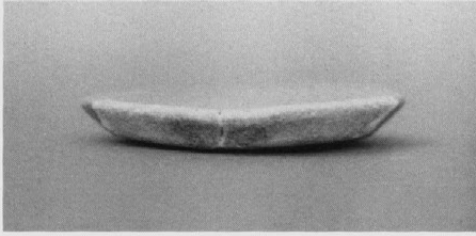
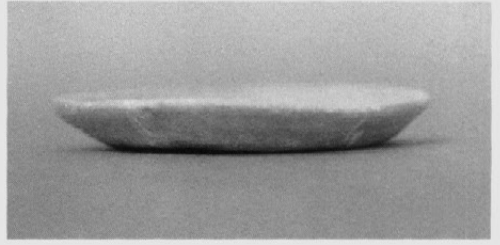
II調査区 落ち込みII-1 (南より)

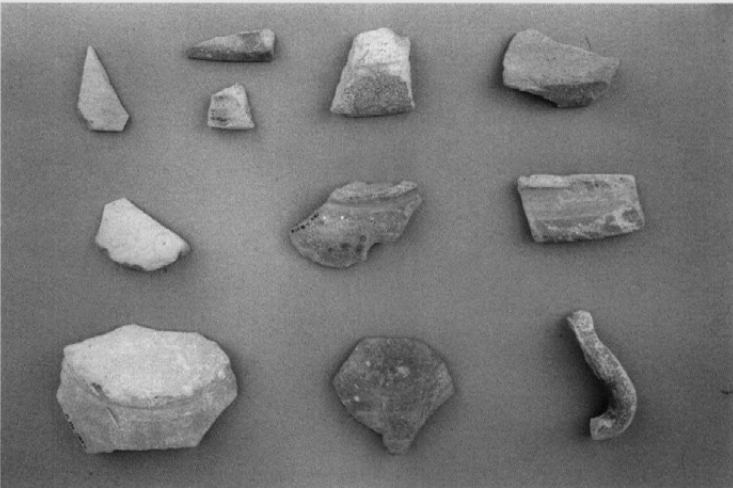
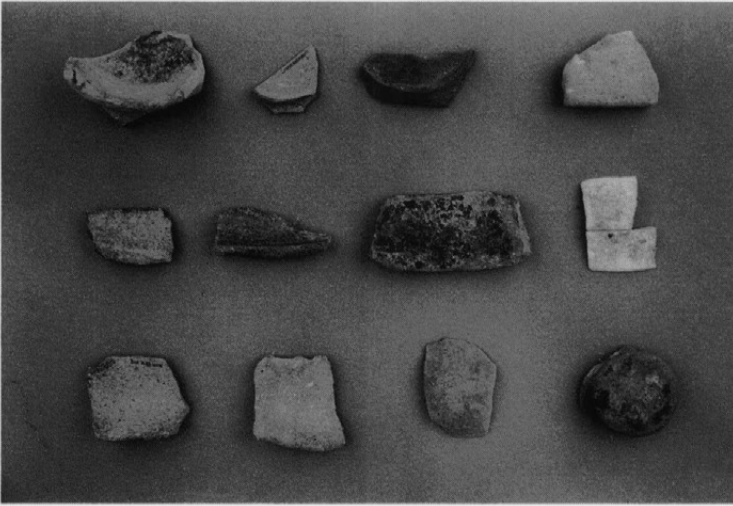


II調査区 落ち込みII-2 (東より)



II調査区 溝 (北西より)





阪南市埋蔵文化財報告 XV

貝 掛 遺 跡

1992年 3 月31日

発 行：阪南市教育委員会社会教育課  
大阪府阪南市尾崎町35の1

印刷者：西岡総合印刷株式会社  
和歌山市吹屋町5丁目54